

「 遠いようで近くにある災害 」

宮崎県 宮崎市立国富小学校 6年 ^{ただ}多田 ^{りょうへい}涼平

毎年、この季節には母の実家から届く白桃がぼくと弟の大好物です。しかし、今年は届きませんでした。倉敷の街の堤防が決壊し、大洪水に遭ったからです。おいしい桃を作っている果樹園のみなさんが大きな被害を受け、畑にも泥水がたくさん入って出荷できないとのことでした。伯母さんの友達の家族は真備町で何時間も孤立し、自衛隊のヘリコプターに救助されたそうです。雨が少なく日照りの多い岡山県でこんなことが起こるなんて。行方不明になった人たちの家族が倒れそうな暑さの中、何日も何時間もかけて捜索している姿をニュースで見るたびに気の毒で何と云えばいいのか、ぼくには言葉が見つかりませんでした。

今まで誰も経験したことのない災害がおこったときにどう行動すればいいのか、何をすれば人の命や街を守ることができるのか。もし自分の住む街で土砂災害があったらどうすればいいのか。命が助かった地域と亡くなった人がたくさんいた地域の違いを自分なりに調べました。

まず、命が助かった地域に共通していたのは雨がそのときにどのような状態にあり、どんな危険が迫っているのかを地域、地区、自治会で情報をつかんで、それを近所の人たちに声かけをし「すぐ避難して下さい!」「避難に助けが必要な人は言って下さい!」などと何度も伝えていたそうです。また、新しい情報が入ったらメールやLINEを送って共有した人たちもいたようです。

40代の息子さんに早く逃げようと言われていたのに、なかなか避難しようとしなかった70代の男性が家の一階が完全につかっけてしまい救助された後に、「早く逃げていればよかった。水が近くにくるだけで、自分の家には入ってこないだろうと思っていた。」と疲れ切った表情で言っているのを報道番組で見ました。自分の経験だけに頼っていては命が危ないのだと知りました。避難した後に「あれ、洪水って聞いたけどたいしたことなかったね」ということになっても避難したことで命は助かるのです。取り越し苦労になっても、避難することは無駄にならないと思います。

また、経験だけで物事を判断せずに、経験したことのない災害はおこるのだという心の準備をすることが大切です。不安になってしまうのではなくて「みんなで協力して何かあれば助け合いましょう」と手を取り合って声をかけ、つながりを強くしていくことが大切だと思います。

ぼくは今まで学校の避難訓練をしているときに「災害なんて本当に宮崎で起こるのかなあ。あ一面倒クサイ。早く終わればいいのに」とサボりたい気持ちがありました。でも西日本の大洪水、土砂災害を知り自分の考えは間違っていたのだと気づきました。とんでもない思い違いをしていました。

「自然災害は来ないと思っていたら、突然やってくる。日本でもどこでも起こる可能性があるんだ。避難訓練をしていなかったら逃げる道も逃げ方も分からない。自分だけでなく、家族や友達の命も守れないんだ。」

ハザードマップを初めて開き、ぼくの住む地区の避難所と経路を確認しました。その後、来年はおいしい桃ができますように、被害にあった全ての人たちが一秒でも早く安心して暮らせますようにと願いをこめて西日本土砂災害の募金をしました。